

がん哲学外来・メディカルカフェ参加者が語る

私のがん体験記

がん体験者が本音で語り合い、自らの生き方を考える場「がん哲学外来・メディカルカフェ」が全国に広がっている。そこに集う参加者に自らの体験を語ってもらう。

私はどうしたいのかを
問われて

長久あずさ

ながひさ あずさ
がん哲学学校 in 神戸 メディカルカフェ参加者

理不尽な言葉

「余命は半年です」。医師の言葉になぜか無感覚の自分がいました。やはりそうなのか、と視線を床に落とした私は「できる限りのことはするから」という医師の言葉を上の空で聞いていました。

2010年43歳の春、左胸にしこりを発見してすぐに乳がん検診を受けました。問題なしとの所見にほっと胸をなでおろし、しこりのことは忘れ去ろうと努めていました。でも、どんどん大きくなっていくことに不安を拭い切れず、別の病院へ行きました。しかしそこでも同じ所見で、私はまた

違う病院に駆け込みました。そして「左炎症性乳がん」と診断が下され、上述のように手遅れと宣告されたのです。治療は抗がん剤投与、もし手術ができるようになったとしても、それは治すためではない、と。

当時私は主人とは別々の教会に通っており、発病後、自分の教会の牧師からはつきりところ告げられたのです。「私の言う通りにすれば必ず神が癒やしてくださる。これまで私の祈りで何人ものがん患者が癒やされてきた」と。そしてがんの原因は私の両親の罪のせいだと言い、両親に代わって悔い改めの祈りをするように命じました。また抗がん剤が投与されたときに見舞いにやって来て、脱毛しないようにと真剣に祈るのでした。しかしその祈りもむなしく脱毛し、主人にしがみついて号泣しているときに牧師からの電話で、「悔い改めろ！夫婦共にのん気すぎる！そんなことではもっと転移するぞ！」と脅すのでした。

私の中で何かが壊れる音がしました。そして次の日、誰にも告げずに福井行きの列車に揺られている自分がありました。福井には自殺で有名な東尋坊とうじんぼがあります。どういうわけか東尋坊という文字が浮かんで頭から離れませんでした。

苦しみの後の自由

しかし、その東尋坊には元警察官で自殺防止活動をしている茂幸雄さんがいることを思い出し、死ぬ前に会いたいと思いましたが、人懐っこい笑顔をした茂さんが私に投げかけた言葉は「あずさはどうしたいの？」でした。そう聞かれて、幼少期からこれまで、親や周囲の人たち、牧師の願いをかなえることに必死で、自分の真の願望を埋没させてきたことに気付きました。茂さんとの出会いで私はいろいろなことを発見しました。私にとつて東尋坊は自殺の名所ではなく、「生き直しの場所」となったのです。

その後の私は今までの分を取り返すかのように動き回っています。その中で、樋野先生の著書と出会いました。樋野先生の創設された「がん哲学外来」は、いかにがんと闘うかという前に、そもそも「生きるとは何か」を遠慮なく語り合うことができる場です。またメデイカルカフェでは、医療だけでは解決できないさまざまな問題を自由に語り合うことができます。

昨年、神戸薬科大学で「がん哲学学校」が開校され、初回から参加しています。毎回いろいろな講師の講演があり、その後の

メデイカルカフェで和気あいあいとおしゃべりをしています。7月に金沢で開かれた「がん哲学外来市民学会」にも母と2人で参加しました。そこで、がん細胞が引き起こす事象は人間社会でも同じように起こると知り、もつと「がん哲学」のことを勉強したいと思うようになりました。

現在の私の病状はさらに重くなり、先のこと考えることができない状況ですが、樋野先生の、「自分の人生に期待するのではなく、人生から期待される人間になる」という言葉を胸に、今、自分でしたいこと、自分でできることを精一杯する、充実した毎日を送っています。

私はカフェで教えられた、自分の好きなことをやる超自分好き人生に病みつきです。今心豊かに暮らせるのは、深い愛情と忍耐をもつていつも変わらず私に接してくれる主人と友人たち、そして医療従事者の方々のおかげです。人の一生は真剣に生きていく人にとつてはとて短いものです。過去を悔やんだり将来を不安がることは、時間を無駄にしているのと同じだと思います。

また、私は私を苦しめたあの牧師を許すことができないでいました。ところが、2014年10月、ついにその日がやってき

ました。その日、主人から「相手を許さないでいると、一番つらく苦しいのはあずさなんだよ」と言われ、許しの祈りに導かれたのです。翌日は日曜日でした。主人は私を自分の教会に誘いました。なぜかわかりませんが、教会に行きたい自分を抑えることができません、私は久しぶりに教会に行くことができました。私は自由になったのでした。現在の私の心情は、「喜びは絶望よりも深く心を流れる」という言葉で言い表すことができます。

がん哲学外来の生みの親
樋野興夫の「言葉の処方箋」

ひのおきお / 順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授
一般社団法人がん哲学外来理事長



「許し」から踏み出す人生のワンステップ

聖書が語る、「病気は神さまの罰などではない」という本来の福音とはまったく異なる理不尽な牧師の言動に傷かれ、絶望を味わった長久さん。そこから許しの祈りへと至って本来の福音を発見した過程には、感嘆させられます。許しは人間にとって最も大切な行為です。相手を「許せない」と思う苦しい気持ちこそ、癒やされるべきだからです。許しにより、自らの心の奥底でくすぶっていた恨みから解放されるとき、人は人生のステップを上り、人格的に成長するのです。